

山田寺出土瓦の調査

飛鳥藤原宮跡発掘調査部

当調査部では1976年から8次にわたって桜井市山田にある山田寺跡を発掘調査し、東回廊が倒壊した状態でみつかるなど多大な成果をあげた。現在、その報告書を作成中である。山田寺は蘇我倉山田石川麻呂が舒明13年(641)に発願、創建した寺院であり、石川麻呂自身が造営途上の大化5年(649)に仏殿の前で自害したことでも知られる。伽藍の完成は天武朝のことだったという(『上宮聖徳法王帝説裏書』『日本書紀』)。今回は、軒丸瓦、軒平瓦、へら書き瓦に関する調査成果の中間報告である。

軒丸瓦 山田寺式、大官大寺式、平城宮式のほか鎌倉時代初頭の巴紋がある。出土量の大半は山田寺式である。紋様(瓦範)の違いで6種(A~F)に分かれるが、同範品でも製作技法によって細分することができる。これを文献の記録と対比しながら解釈すると、次のように考えられる(図1)。

まずA種は分布から金堂所用である。その範傷進行順に、瓦当に接合する丸瓦部先端の加工をみると、片柄形(凹面と先端斜めからの二つのカット:断面)→楔形(先端斜めからのカット:断面)→未加工(断面)と変遷する。片柄形が大半を占める。金堂は皇極2年(643)建立、石川麻呂自害までに完成しているのので、丸瓦部先端片柄形加工のA種はそれ以前の製作であろう。B種は塔所用、D種は回廊所用である。B・D種の丸瓦部先端の加工はともに片柄形に限られるので、2種の製作年代は金堂完成に近い時期といえる。ところが、塔の完成は記録では天武5年(676)である。B種の製作は塔の完成よりもかなり先行していた。B種の丸瓦部先端の二つのカット面は幅が広く、A種とは明確に区別でき、D種のカット面の幅はA・B両種の間値といえる。したがって、3種のカット面の幅の差は、製作時期の微妙な差を示す可能性が高く、A→D→Bの順に製作されたと考えられる。

B種の紋様をまねたC種はその分布から塔と宝蔵所用である。丸瓦部先端の加工は楔形が主体であるので、天武朝の造営再開後に不足分をC種で補って塔が完成したとみられる。さらに、天武14年(685)に講堂の丈六仏開眼の記録を尊重すれば、分布からは特定できない講堂の創建軒丸瓦はC種をその有力候補と考えたい。こうして、丸瓦部先端の片柄形加工は石川麻呂自害以前に、楔形加工は造営再開後の天武朝に位置づけられる。A・C種の丸瓦部先端未加工品の年代は、共伴した平城宮式6311A・Bの存在や軒平瓦との組み合わせによって、奈良時代前半とみることができよう。これらは出土量が少なく、修理補足用であろう。なお、小型品のE・F種は出土量が微量のため所用堂宇を特定しがたい。

丸瓦部先端の加工はE種が片柄形、F種が楔形である。

A・B・D種の片柄形加工の一群は丸瓦の接合位置(瓦当紋様に対する位置関係)に規則性がない。瓦当裏面に同心円状のナデ調整痕を残すものがあり、回転台上で成形・調整した可能性がある。A・C・F種の楔形加工と未加工品の場合、丸瓦接合位置は90度ごとに集中する。瓦範を正方形の板に固定したり、正方形の板から瓦範を彫り出したと考えられる。

軒平瓦 軒平瓦には、三重弧紋、四重弧紋、唐草紋などがあり、その95%以上が四重弧紋である。四重弧紋を8形式に分類した(表1、図2~4)。

創建時の主要な四重弧紋は第2弧線(上-凹面側-から数えて2本目の凸線)を太く作ったA・Dである。Dは少ない。Bも4本の弧線の1本を太くするものがあり、製作技法からも創建期に含めてよいだろう。Cはこの紋様の原則が崩れ弧線がすべて同じ太さとなる。天武朝の造営工事再開時に製作された瓦と考える。一枚作りのF~Hは奈良時代から平安時代前期に属し、屋根の葺き替えや補修に使用した瓦。これまで四重弧紋軒平瓦はすべて創建時と考えられていたが、後世の補修に際しても四重弧紋は作り続けられていたのである。

堂塔ごとの所用軒平瓦は、金堂と回廊がA、塔がAとB、宝蔵がCである。軒丸瓦同様、皇極朝に造営された金堂と同じ軒平瓦が、天武朝に造営された塔にも大量に使用されている。修理瓦は、金堂にF・H、塔にGが使われた。奈良時代前半のFは軒丸瓦Aの最終段階の製品と組む。

この時の改修は屋根を全面的に葺き替え、建物を塗り直す本格的な工事だった。金堂と塔の周辺から出土する軒平瓦の凸面には2種類の朱線をのこすものがある。創建時の淡赤色の朱線と奈良時代の濃赤色の朱線である。分析の結果いずれも酸化鉄(ベンガラ)ではあるが、微量成分の含有量が違うことがわかった。また、朱線の位置から判断して、この時に創建時15cm前後だった茅負からの瓦の出を3cm縮めて12cm前後にする。

へら書き瓦 へら書き瓦は609点あり、文字・戯画・記号などの種類がある。多くは丸・平瓦にあり、時期によってその位置や内容に違いがある。7世紀代のへら書きは丸・平瓦の凸面に、8世紀代では平瓦の凹面に書くことが多い。戯画と記号の大半は7世紀代。文字には「奈尔波」、「九々八十一、八九七十二」(7世紀・図5・6)、「大」(8世紀)などがある。「大」は207点を数える。「奈尔波」は難波の意味で、「難波津に咲くやこの花冬菴もり今を春べと咲くやこの花」(『古今集』仮名序)の一部であろう。これは下級官人の手習い歌であり、これまで知られていた木簡や墨書土器の例の多くは8世紀代であるのに対し、7世紀代にさかのぼる資料として注目できる。(花谷 浩・佐川正敏・金子裕之・大脇 潔)

2 施紋後分割を示す紋様の重なり(B)

3 瓦分割後施紋を示す紋様端部(CII)

4 瓦範押捺を示す木目圧痕(H)

5 「奈尔波」へら書き瓦

6 九々を記したへら書き瓦

形式	成形技法	叩き	施紋手法	紋様の特徴
A	粘土板桶巻作り	平行・格子	型挽き・施紋後瓦分割	第2弧線が太い
B	同上	格子	同上	凹線広く底面が平坦
C I	同上	格子	同上	弧線は4条とも同じ太さ
C II			型挽き・瓦分割後施紋	
D	同上	格子	型挽き・施紋後瓦分割	第2弧線太いが紋様平板
E	同上	縄	型挽き・施紋後瓦分割	弧線は4条とも同じ太さ
F	一枚作り	格子	型挽き	同上
G	同上	縄	同上	同上
H	同上	縄	範型押捺	同上

表 山田寺出土四重弧紋軒平瓦の分類